ことばとジェンダー

中村桃子

ことばとジェンダー

江苏工业学院图书馆
藏书章

中村桃子

著者紹介

1955年　東京生れ
1978年　青山学院大学文学部卒業
1981年　上智大学大学院外国語学研究科博士課程前期修了
1987年　関東学院大学講師
1992-94年　カナダ・ブリティッシュ・コンロンビア州立大学客員研究員
1997年より　関東学院大学教授
著　書　『婚姻改姓・夫婦同姓のおとし穴』『ことばとフェミニズム』（ともに勁草書房）
訳　書　デボラ・カメロン『フェミニズムと言語』（勁草書房）
e-mail : momo@kanto-gakuin.ac.jp

ことばとジェンダー

2001年2月10日　第1版第1刷発行

著者　中村桃子（なかむら ももこ）

発行者　井村寿人

発行所　株式会社　勁草書房（けいそうしょぼう）

112-0005 東京都文京区水道2-1-1　振替 00150-2-175253
電話（編集）03-3815-5277／FAX 03-3814-6968
電話（営業）03-3814-6861／FAX 03-3814-6854
大日本法令印刷・東京美術紙工

©NAKAMURA Momoko, 2001　Printed in Japan
＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。
＊本書の全部または一部の複写・複製・転訳載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。

ISBN4-326-65247-0
http : //www. keisoshobo. co. jp

EYE LOVE EYE

視覚障害その他の理由で活字のままでこの本を利用出来ない人のために、営利を目的とする場合を除き「録音図書」「点字図書」「拡大写本」等の製作をすることを認めます。その際は著作権者、または、出版社まで御連絡ください。

はじめに

「ことば」と「ジェンダー」の関係と聞くと、ひどく難しいことのように感じるかも知れない。けれども、私たちは毎日女として男としてことばを使って関わり合っているわけで、ことばとジェンダーについて考えることは、私たちが日常的に経験している身近な出来事について考えることに他ならない。たとえば、今まで自分のことを「ボク」と呼んでいた男の子がある時から「オレ」と言い出すのはなぜだろう。小中学生女子の言葉づかいが「男のようだ」という指摘を聞くが、彼女たちの行動を動機付けているものは一体何なのだろう。女が会議などの公的場面で発言する時には「女らしく話す」ことと「論理的に主張する」ことを両立しなければならないのはどうしてなのだろう。男友達はなぜ女友達のように「おしゃべり」しないのだろう。ことばとジェンダーの関係を問うことは、このような身近な関わり合いが社会の価値観や支配構造から思った以上に影響を受けていることに気付くことでもある。

ことばとジェンダーの関係をめぐっては、二つの大きな転換期があった。最初の転換期は、もちろん「ジェンダー」という概念の登場である。「ジェンダー」という概念がなかった時には両者の関係が問題にされることはなかった。「ジェンダー」とは、性に社会的側面があることを明確にするためにフェミニズムによって提案された概念である。それまでは、「性」は生物学的に決定されているという考え方が強かった。しかし、身体的な性とは逆の性を生きている人がいることを見ても分かるよ

うに、「性」には社会的に作られ社会的に学習される側面がある。フェミニズムは、「セックス」（生物学的性別）と区別して「ジェンダー」（社会・文化的性役割）という概念を提案することで、性には、生物学的レベルだけでなく社会的レベルのあることを示したのである。（「ジェンダー」は、「女らしさ・男らしさ」「性役割」などと訳されている。）近年では、「ジェンダー」だけでなく「セックス」も社会的に作られていることが指摘されており、「ジェンダー」概念は、私たちが生物学的に捉えがちな「性」というものが社会の中で歴史的にどのように形成されてきたのかを問題にすることを可能にしたという点で画期的な概念なのである。

「ジェンダー」が社会的に作られたものならば、社会の権力構造とも大いに関係していることになる。今あるジェンダーの「区別」が生物学的性別に基づいたものではないのなら、それは「事実」ではなく、社会の権力構造の中で歴史的に作り上げられてきた「イデオロギー」だということになる。どの社会にも「女／男とはこのようなものである」という「性」に関する信念・知識・常識が存在するが、それらは男支配を正当化するための区別を形作るイデオロギーとなる。つまり、「性」の区別を生物学的な事実として受け入れるのではなく、「差別するための区別」とみなしてそのメカニズムを探究することができるようになったのである。

二番目の転換期は、「ことば」を抽象的な「構造」ではなく、社会を作り上げる「行為」と捉える「構築主義」と呼ばれる考え方によってもたらされた。従来「ことば」とは私たちが情報や考えを伝えるための「道具」のように考えられてきた。伝達の道具である以上、自立した「構造」を持つとみなされ、従来の言語研究は「主語—述語」のような抽象的な言語構造を分析する傾向が強かった。し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

かし、研究が進むにつれて、構造を明らかにするためには、「ことば」が使われている社会を考慮することが不可欠であることが明らかになってきた。どのような状況で、誰が誰に対して、何の目的で使ったのかが分からなければ、「ことば」の意味さえ説明できないのである。ここから、ことばを社会から自立した「構造」として捉えるのではなく、社会に密着した「行為」とみなす視点が生まれた。「ことばを使う行為（ディスコース）」は、社会から影響を受けるだけでなく、社会に影響を与える社会的行為である。「ことばを使う行為」は、社会の権力関係やその社会で常識となっている考え方（イデオロギー）を作り上げる過程である。さらに、言語を単なる伝達の道具とみなすのではなく、私たちは、言語を使って相互にかかわり合うことで、自分はどういう人間なのか、相手とどのような関係にあるのかを表現しているという視点、つまり、「ことばを使う行為」によってアイデンティティーや人間関係を作り上げる力が探究されている。私たちの「ことばを使う行為」は社会構造やイデオロギーに縛られながらもそれらを変革していく力を持った社会的な実践なのである。

「構築主義」の出現により、「ことば」と「ジェンダー」はまったく新しい形で結び付けられることになった。従来の研究では、「女／男」という二つしかないジェンダーが言葉づかいと直接結びつけられ、「女と男はどのように異なる言葉づかいをするのか」を明らかにすることが課題となっていた。しかし、私たちは「ことばを使う行為」によってお互いのアイデンティティーだけでなく社会のイデオロギーも作り上げているという考え方は、「ジェンダー」も、「ことばを使う行為」によって作り上げられるアイデンティティーとして、さらに、イデオロギーとして理解する必要を示している。

新しい「ことば」と「ジェンダー」の関係は、大きく三つの視点から分けて考えることができる。

ひとつは、ジェンダーを、私たちが互いに関わり合う中で作り上げるアイデンティティーの一部として捉える視点である。私たちは、ことばを使って相互に関わり合うことで、どのような「女」あるいは「男」として立ち現れようとしているのか。二つ目は、ジェンダーを、「ことばを使う行為」が歴史的に積み上げられることで形成されたイデオロギーとして捉える視点である。「性」に関するイデオロギーは「性に関して語られたことば」によって作り上げられる。「アイデンティティーとしてのジェンダー」と「イデオロギーとしてのジェンダー」は「ことばを使う行為」において交わることになる。私たちは「ことばを使う行為」において、すでにある「女／男とはこういうものだ」というイデオロギーを参考にし、受け入れ、あるいは、反発することで特定の「女／男」として立ち現れるからである。最後に、これら二つの視点を社会の支配関係に結びつける視点がある。「ジェンダー・イデオロギー」は既存の支配構造を正当化する形で秩序付けられている。今ある「ジェンダー」の関係は女に男支配を納得させるよう機能しているのである。同時に、そのようなイデオロギーを参考にしながら行われる個々の相互行為も社会の支配関係に結びついている。私たちは「ことばを使う行為」において、イデオロギーに従った「女／男らしさ」を作り上げて支配構造を補強することもできるし、それに抵抗する「女／男」として立ち現れることで、支配構造を変化させることもできる。「ことば」と「ジェンダー」は、私たちが、変化する社会構造の中で「ことばを使う行為」によって互いにアイデンティティーを交渉し合うダイナミックな過程において関係付けられることになったのである。

ここで、本書のタイトルと「言語とジェンダー研究」というこの分野の名称の関係について述べたい。ことばとジェンダーの関係を中心課題とする一連の研究は「性差別と言語研究」「フェミニズム

言語学」など様々な名称で呼ばれてきた。近年、「構築主義」による転換が取り入れられるに従い、「言語とジェンダー研究」という名称が定着してきた。本書では、この「言語とジェンダー研究」という名称を積極的に使うことにした。分野名を明確にすることで、研究史を振り返る部分では、過去の様々な分野にまたがる研究を「言語とジェンダー研究」として統合し、新しい枠組みに基づいて評価し直すことができるようになるからである。また、新しい「ことば」と「ジェンダー」の関係を理論化する試みにおいても、様々な分野に散在している研究を取り込むためにも、「言語とジェンダー研究」という名称が有効であった。本書では、言語学やフェミニズム理論をはじめとして社会学・人類学・精神分析などの隣接分野の研究成果を吸収して拡大し続けている、「ことば」と「ジェンダー」に関する研究を包括的に統合する名称として「言語とジェンダー研究」を用いている。しかし、現在ではまだ「言語とジェンダー研究」という名称が十分に確立しているとは言えず、この名称に対して狭いイメージを持っている人も多いため、本書のタイトルは「ことばとジェンダー」とした。本書は、「ことば」と「ジェンダー」に関するこれまでの研究の歴史的発展を跡付け、現在の理論を概説し、最新の研究を紹介している。

「言語とジェンダー研究」とは、「ことばを使う行為」を通して、私たちはどのような女であり男であろうとしているのか。その際に、社会におけるジェンダーに関するイデオロギーをどのように資源として使い、または、それらのジェンダー・イデオロギーからどのように制約を受けるのか。私たちが「ことばを使う行為」は、ジェンダーの権力関係によってどのように左右されるのか、あるいは、権力関係をどのように変革しているのか。ジェンダーに関するイメージ・規範・カテゴリーは、「こ

とばを使う行為」によってどのようにして作り上げられ、正当化され、普及しているのか。それらのプロセスは社会構造とどのような関係にあるのか、などの興味深い問題を解明する分野である。

しかし、英語で書かれた入門書は多数あるが日本語でまとまって読めるものはまだ少ないため、日本においては「言語とジェンダー研究」が言語研究とジェンダー研究の双方に有益な示唆を与えられる分野であるという認識も薄く、この分野に対する誤解もある。

本書をきっかけに、より多くの読者がこの分野に興味を持って下さることを願って、入手できる限りの日本語の研究を含めるよう心がけた。しかし、私個人の情報収集力には限りがあり、貴重な研究を見落としているかも知れない。また、これまでの「言語とジェンダー研究」が英語研究に基づいて発展してきたため、本書で取り上げた研究も英語に偏ってしまった。日本語の研究に関しては、別の機会にぜひまとめたいと考えている。

なお、研究の問題点を指摘する上で具体例としていくつかの著書を引用させていただいたが、あくまで代表例として引用しているだけで、個々の著者を批判する意図は全くない。

また、データは全文をそのまま引用するのが最良である。しかし、できるだけ多くの研究に言及することを主眼においたために、紙面の都合で省略・書き換えを余儀なくされた。興味のある読者はぜひ原典に当たられたい。

本書の構成は、大きく四つの部分から成る。序章、研究史である一章〜四章、ポスト構造主義・構築主義の考え方と、その影響を受けた新しい「言語とジェンダー研究」の枠組みを概説している五章、

そして、近年の「言語とジェンダー研究」の個別研究を紹介している六章〜九章である。

序章では、「言語とジェンダー研究」の発展をフェミニズムとの関係から跡づけている。フェミズムとの関係を重視したのは、この分野がフェミニズムに促されて発展してきただけでなく、今後もフェミニズムと関わり続けることで言語学の枠組みを越えて大きく発展すると考えるからである。

序章の3では、日本語における研究の歴史も概観している。英語における研究史は一章〜四章で詳しく取り上げているが、日本語の研究史にふれる機会がなかったためである。六章から九章の個別研究では、できるだけ多くの日本語の研究を紹介している。

一章は、「言語とジェンダー研究」の古典とも言えるロビン・レイコフの『言語と女の地位』とデール・スペンダーの『男が作った言語』の主張をまとめている。両書には、女がことばを使う時に起こる様々な問題が広く指摘されており、それらは今でも日常的に見られる身近な問題である。現在もそのすべてが解明されているわけではなく、二人の先駆者が指摘した問題を知ることは、今後の研究の貴重なアイディアとなる。また、両者の主張に対しては様々な批判が行われたが、その後の研究がこれらの批判に基づいて発展してきたという点で、批判の内容を押さえておくことは重要である。

二章〜四章では「言語とジェンダー研究」のうち「言語使用とジェンダー研究」の歴史を取り上げている。「言語とジェンダー研究」は従来二つの視点から行われてきた。ひとつは、話し手の性と言葉づかいの関係を探り「話し手の性は言語使用にどのような影響を与えるのか」を明らかにする「言語使用とジェンダー研究」の分野。もう一つは、ことばによってジェンダーがどのように表現されているのか、特に男女を表す表現の不均等を明らかにする「ジェンダー表現研究」である。両者は、言

語学における「言語使用」と「言語体系」の二区分に従って別々に発展してきた。しかし、言語の体系は言語が使われることによって変化することを見ても明らかなように、体系と使用は不可分に結びついている。今後は、五章で見るように、両方の分野がより大きな枠組みの中で包括的に取り扱われると思われる。「ジェンダー表現研究」の発展については中村（1995a）でまとめているので参照されたい。

二章は、ラボフ派の社会言語学の枠組みに基づいた「性差研究」を概説している。この時期には、話し手はその性によってどのように異なる言語使用を行うかが、主に発音を中心に数量的に分析された。しかし、たとえば、女の方が男よりも標準語の発音をすることが多いという「言語的性差」が明らかになっても、その理由が説明できないという問題が発生した。そのため「性差研究」の枠組み全体が問い直された。なぜ、言語研究に「性」を取り入れることが、すなわち「言語的性差」の解明に直結してしまったのか。それは、どのような「ジェンダー」観を前提としているのか。本書では、「性差研究」の問題点を「本質主義的ジェンダー観」をキーワードに解明している。現在も、言語とジェンダーの関係を研究するというと、「女と男はどのように異なる言語使用を行うのか」を問う傾向が強いが、このような問題設定が、なぜ、言語研究として不適切なだけでなくフェミニズム運動にも弊害をもたらすのかを認識しておくことは重要である。

「性差研究」以降、言語学の研究対象が発音から文、文から会話やテクストなどの「ディスコース」へと広がるにつれて、「言語とジェンダー研究」においても、ディスコースとジェンダーの関わりが研究されるようになる。三章では、ディスコース分析を異性間の会話と同性間の会話に分けて見て行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

く。異性間の会話分析では、男が女をさえぎって会話を「支配」することが明らかになった。一方、同性間の会話分析では、女同士の会話と男同士の会話は異なる特徴を持っていることが明らかにされ、その違いが、「女は協調的に会話を行うが、男は競争的に行う」という形で一般化された。女同士の会話が研究対象になったという点では「性差研究」から一歩前進したと言える。しかし、同性間の会話分析が女の多様な言語行動を明らかにするのでなく、「協調的会話」という一般化に向かってしまった点に問題がある。これは「女を均質な集団とみなして性差を強調する傾向」がいかに根強いかを示している。

四章では、三章で見た異性間の会話分析から発展した「支配モデル」と同性間の分析に基づいて提案された「文化差モデル」を概説する。両者は「支配か違いか」というジェンダー関係に関する二つの相反する捉え方に立脚しており、「文化差モデル」に対しては「ジェンダーの支配関係を考慮しない」という痛烈な批判が繰り返された。その過程で明らかになったのは、ジェンダーとは「男は女を支配する」という支配関係だけから捉えられるものでも、「女と男は異なる」という差異関係だけから捉えられるものでもないという認識である。よりダイナミックなジェンダー概念、そして、社会の支配構造とディスコースの関係を射程に入れた枠組みが求められた。

五章では、このような枠組みとして現在の「言語とジェンダー研究」に包括的に取り入れられている「構築主義」の考え方を概説している。「構築主義」は、「ことばを使う行為」において「アイデンティティー」や「権力関係」が作り上げられる（構築される）過程を重視している。この考え方に従えば、従来の「言語とジェンダー研究」で設定されていた「女／男だから、こういう話し方をする」

という関係は逆転し、「どのような言語行為を行うことで、どのような女／男であろうとしているのか」という視点が可能になる。

六章から九章では、「構築主義」の視点を取り入れた最新の研究の中から、各章ごとに、「男性性」「メディアと女性性」「セクシュアリティ」「イデオロギーとしての日本語の女ことば」の個別研究を取り上げている。

この他にも、「妊娠・出産」（Talbot 1998）「母性・父性」（Ochs & Taylor 1995）「性暴力」（江原 1995a Ehrlich1999）「ニュースメディア」（Carter, Branston & Allan 1998）「若者ことば」（『日本語学』1994, 10月号）など言語とジェンダーに関わる様々な研究が行われているが、紙面の都合で扱うことができなかった。

現在「言語とジェンダー研究」は大きく広がっている。「ことばを使う行為」がその社会の歴史や文化と密接な関わりがあることが認識されるにつれ、日本語を含む多くの言語の研究が渇望されている。本書が、そのような広がりのきっかけになればこれ以上の喜びはない。

中村桃子

目　次

はじめに

序章　フェミニズムから見た「言語とジェンダー研究」……1

1　フェミニズムから誕生した「言語とジェンダー研究」　1

2　言語学的研究からフェミニズム運動と関わる言語研究へ　4

3　日本における言語とジェンダー研究　8

一章　レイコフとスペンダーの残したもの……15

1　レイコフの「女の言語」という概念　15

2　レイコフが指摘した女の言語行動を取り巻く問題　18

3　レイコフへの批判とその後の発展　19

4　スペンダー――女の「沈黙」と「疎外」　24

二章　社会言語学における「性差研究」とは？……31
1　社会言語学の「社会成層化」という枠組み　32
2　女は男より多く標準形を用いることを示した研究　33
3　なぜ女は男より標準形を用いるのか——性差を説明する　34
4　社会成層化の問題点　37
5　「性差研究」の根本的問題点——本質主義　39
三章　ディスコース分析——異性間と同性間の会話はどうちがうのか……51
1　ディスコースとは　51
2　異性間の会話——会話における支配　53
3　同性間の会話——協調的会話と競争的会話　57
4　「協調的会話」と「競争的会話」の二分法に対する批判　68

四章　「言語とジェンダー研究」の三つのモデル
「支配モデル」「文化差モデル」「劣った言語モデル」……71
1　「支配モデル」とは何か　72
2　「支配モデル」に対する批判　72
3　「文化差モデル」とは何か　74
4　「文化差モデル」に対する批判　78
5　「劣った言語モデル」「支配モデル」「文化差モデル」に共通した問題点　86

五章　ジェンダーの構築……89
1　ディスコースと社会構造はどのような関係にあるのか　90
2　ディスコースとアイデンティティーはどのような関係にあるのか　101
3　「ジェンダー・アイデンティティー」と「ジェンダー・イデオロギー」　110
4　構築主義に対する批判　122
5　これからの「言語とジェンダー研究」　125

六章　男性性の構築……131
1　多様な「男性性」と「主導的男性性」　131
2　主導的男性性と従属的男性性　141
3　ジェンダー関係の変化に対する抵抗　145
七章　女性性・メディア・消費……155
1　消費者としての女性性　155
2　メディアのディスコース　158
3　読者を構築する——序列的相互依存　164
4　ジェンダー・ステレオタイプを作り続けるメディア・ディスコース　167
5　メディア・ディスコースにおける創造的なアイデンティティー構築　171
八章　セクシュアリティ……179
1　性的志向・嗜好　180

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.